第16回東海小児整形外科懇話会

主題：側弯症

当番幹事：徳山　剛(岐阜県立希望が丘学園)
日　　時：平成13年2月10日(土)
場　　所：大正製薬(株)名古屋支店8階ホール

一般演題　　座長：徳山　剛

1．愛知県特殊教育学校での災害状況

愛知県青い鳥医療福祉センター　○岡川敏郎
名古屋養護学校　大山栄美子・加藤育子

愛知県下には盲学校2校，聾学校3校，肢体養護学校6校，知的障害養護学校7校，病弱養護学校1校があるが，病弱養護を除きこれら特殊教育諸学校の学校災害について何か特徴がみられるのか調査した．対照の小中学校に比べ盲学校，肢体養護での外傷頻度は高かった一方，骨折の頻度は肢体養護をはじめ対照校より頻度は少ない等の特徴がみられた．

2．上腕骨延長を行った軟骨無形成症の2症例

愛知県心身障害者コロニー中央病院整形外科
○伊藤弘紀

軟骨無形成症2例の上腕骨延長を経験した．〔症例1〕男児，13歳時，Ilizarov創外固定器を使用し，延長をした．術中に約20°の伸展矯正を加えた．延長量は右82 mm，左78 mm，固定期間は，右204日，左302日であった．〔症例2〕男児．12歳時，Orthofix創外固定器を使用し，右73 mm，左72 mmの延長を施行．固定期間は240日であった．

2例ともに，延長終了後の肘関節ROM制限なく，日常生活上にも満足な結果が得られた．

3．手術治療を行った重複肢(足)の1例

名古屋市立大学整形外科
○中川克秀・和田郁雄・冨田浩司
寺澤貴志・堀内　統・小川　孝
三井裕人・松井宣夫
名古屋市立城西病院整形外科　山田麻記子

症例は1歳1か月の女児．出生時より右の重複足を認め，生後1か月時に近医産科より当科を紹介され受診した．初診時X線像上，右股関節から足部にかけて骨格の重複を認め，股・膝・足関節の可動域制限ならびに右足部の著しい尖足・凹足変形を伴っていた．生後6か月時に，まずは右足部の重複変形に対する形成術を行ったので文献的考察を加えて報告する．

4．著明な足関節外反変形をきたしたOllier病の治療経験

浜松医科大学整形外科
○星野裕信・西村行秀・澤田智一
山崎　薫・長野　昭

症例は7歳，女児．主訴は右足関節の変形と疼痛．内軟骨腫が右大腿骨大転子部，右腓骨頭および腓骨遠位部，右足部に存在し，Ollier病の診断でfollowされていたが，右足関節の外反変形が進行し40°の外反となった．脚長差は2.5 cmで，矯正骨切りにより生じる脚長差を最小とすべく果上部にて骨切りをデザインし，創外固定器を用いて矯正骨切り術を施行した．本症例において若干の文献的考察を加え報告する．

5．ダウン症候群に伴った大腿骨頭すべり症の1例

名古屋大学整形外科
○高嶺由二・北小路隆彦・鬼頭浩史
大嶋義之・栗田和洋・岩田　久

症例は14歳，男子．特記すべき内分泌異常はない．生後よりダウン症候群と診断されていた．11歳10か月時に右下肢違和感出現．その2週間後起立不能となったため来院．X線にて右大腿骨頭後方すべりを認めacute on chronicの大腿骨頭すべり症と診断した．初診時X線でPTAは60°，牽引後は47°となりin situ pinningを行った．術後良好な結果を得たので文献的な考察を加えて報告する．

6．尺骨の急性塑性変形を伴う橈骨脱臼骨折の1例

三重県立志摩病院整形外科
○鍋島清隆・新谷　健・加藤純一郎
山下康生・田島正稔・小保方浩一

近年，急性塑性変形を伴った脱臼・骨折の報告は，散見されることが多くなった．今回我々は，小児尺骨急性塑性変形に橈骨頭の前方脱臼と骨幹部骨折を伴った患者を，徒手整復および経皮的ピンニングで加療した．その1例の経験を若干の文献的考察を加えて報告する．

症例検討　　座長：徳山　剛

1．脊椎，骨端・骨幹端に著明な変形を伴った小人症

三重県立草の実リハビリテーションセンター
○明田浩司・西山正紀・二井英二
金山クリニック　杉浦保夫

症例は47歳，男性．身長110 cm，arm span 110 cmと均衡型小人症である．X線上，管状骨の短縮と骨端，骨幹端におけるバーベル状変形，骨盤の変形を認め，脊椎はbamboo spine様である．鑑別診断として，変容性骨異形成症，先天性脊椎・骨端異形成症などが考えられる．診断について御教示のほど宜しくお願い致します．

2．脊柱側弯を合併した原因不明の症候群と考えられる1例

藤田保健衛生大学整形外科
○高橋明子・中井定明・志津直行
吉沢英造・田中　徹・西本政司

患者は24歳の男性で，右凸95°の側弯と約90°の胸椎後弯に対して今回後方固定手術が行われた．この患者は，出産は正常であったものの，milestoneが遅延し，診察時に知能低下，眼球突出，眼

筋麻痺，高口蓋などを伴っており，未診断の症候群を有すると推察された．基礎疾患の診断を検討していただきたい．

主　題　　座長：細江英夫

1．重度障害児とモールド型座位保持装置―側弯の経過―

名古屋市立大学リハビリテーション部
○石井　要・和田郁雄・多和田忍
松井宣夫

重度障害児は座位保持が困難，あるいは不能な場合がほとんどである．モールド型座位保持装置は姿勢保持のみでなく，脊柱変形の矯正と進行予防にも有用と考えられる．

我々は，1993年4月から現在まで姿勢保持を目的にモールド型座位保持装置を作製している．今回初期の3年間に作製した28名の児童の経過と側弯の状況を調査したので報告する．

2．神経線維腫症に伴う側弯症―10歳以下の手術例の検討―

名城病院整形外科
○松原祐二・川上紀明・金村徳相
中島　晶
名古屋大学整形外科　松山幸弘・後藤　学

神経線維腫症に伴う側弯症は進行性であり，手術後偽関節率の高さや，変形の進行などその治療に難渋することが多い．今回，第二次性徴前である10歳以下の神経線維腫症に伴う側弯症の手術例5例を検討した．性別は男児3例，女児2例で，手術時年齢は6～10歳，術前側弯度は58～88°(平均69.4°)であった．手術は一期的前方後方固定術3例，二期的前方後方固定術2例であった．これら症例の手術成績，術後経過など検討し報告する．

3．レックリングハウゼン氏病の脊柱側弯に対する胸腔鏡を使用しての胸椎前方固定

名古屋大学整形外科
○松山幸弘・後藤　学・川上　寛
夏目直樹・稲生秀文・岩田　久
名城病院整形外科　川上紀明
名古屋第二赤十字病院整形外科　佐藤公治

近年脊椎外科領域においてVideo Assiste Thoracoscopic Surgery (VATS)の有用性についての報告は多い．従来の大きな皮膚切開を要するthoracotomyと違い，小皮膚切開を加えるだけで胸椎固定を行えるVATSの意義は大きい．特に開胸してもアプローチの困難な上位胸椎部の脊椎固定には有用と考える．しかし合併症も存在する．我々はVATSを使用して，脊柱側弯を伴ったレックリングハウゼン氏病5人の上位胸椎を固定したが，その手技上のポイントと合併症を検討したので報告する．

4．胸椎側弯に対する固定手術後に腰椎分離をきたした1例

藤田保健衛生大学整形外科
○亀井　剛・中井定明・志津直行
吉沢英造・田中　徹・西本政司

対象は29歳の女性で，特発性側弯症の患者である．患者は13歳時に共同演者が勤務していた施設を初診し，アンダーアームブレースによる保存的治療がなされた．その後，脊柱変形が増悪したことから1987年，16歳時にT4からL3にスクエアエンデッドのハリントンロッドによる後方からの矯正固定手術を横突起ワイヤリングと共に受けた．術後には2週間の体幹キャスト固定ののち体幹硬性装具を装着し，骨癒合を得た．本患者は手術後13年を経過した時点で腰痛を主訴として外来を受診し，X線検査の結果，L4に脊椎分離が診断された．この患者のような脊柱側弯症に対する固定手術後に固定範囲外で生じる変化について述べる．

5．特発性側弯症に対しKASS(Kaneda Anterior Scoliosis System)を用いた脊椎前方矯正固定術の経験

岐阜大学整形外科
○瀧上伊織・児玉博隆・大野義幸
細江英夫・清水克時

症例は14歳，女性．特発性側弯症．12歳時より背骨の曲がりに気づき，それが増強してきたため当科初診した．初診時Cobb角はT4 11で80°，T11 L4で54°であった．入院後，コトレル牽引を3週間行い，右開胸にて前方よりKASS(Kaneda Anterior Scoliosis System)を用いて脊椎前方矯正固定術を施行し，良好な結果を得たので報告する．

特別講演　　座長：清水克時

日整会教育研修会(認定1単位●● ●959-00)

「小児脊椎・脊髄疾患」

東北大学大学院医学系研究科体性外科学分野教授
国分正一先生